一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　100円
㈱橋本清文堂

旧金沢一中本多町校舎を偲んで

母校、泉丘高校がこの度創立九十周年を迎え、泉野原頭に堂々五階建の偉容を誇る校舎の新築をみ、目下建設中の講堂と共に来春には県下最大の設備をほこる学校が出現する運びとなりました。

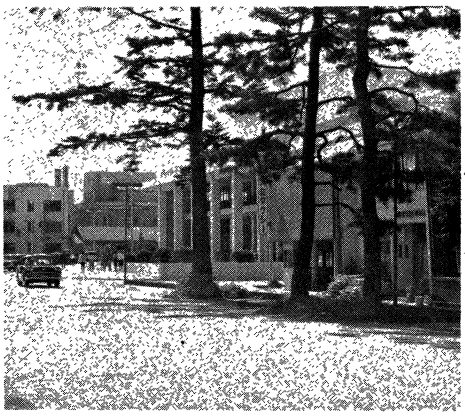
この時に当り、現泉丘高校の前身たる旧金沢一中の旧本多町校舎のあとを振り返るのも又意義あることかと思い、その跡を回顧してみたい。

旧金沢一中の発足時の新道校舎は明治十三年に大谷派が新道通りの西福寺西隣りに新築し、加賀教校から共立尋常中学校、大谷尋常中学校へと使用されたもので、当時は道路に面した狭い校庭をはさんで正面に講堂、左手に教室（二階建一六教室）右手に管理棟が並び、講堂は小規模ながら欧風の意匠を加味した洋館造りであったが、教室は一室の収容力が三十五、六人程度で窓が障子張りの暗い貧弱な校舎であり、運動場は近くの専光寺境内を借りていたという。この為、金沢一中は開校当初より、その校舎の新築は緊急課題であった。

しかし、新築の計画は遅々として捗らず、明治二十八年に至って、ようやく兼六園に南接する出羽町の長谷川邸の所有地（現兼六園南部）が新築予定地として決定されたが一部から反対論が出され計画の変更を余儀なくされ、二十八年暮に下本多町を敷地として決定した。

県は二十八年度予算から同地の買収費として一一、三六四円余を支出することとなり、校舎の建設が始まった。

初代校長の富田輝象の後任の野田藤馬校長が着任して間もなく本多町校舎の全工事が完了し、三十一年一月から使用されはじめた。工事は当時の新竪町の新保外次郎の請負いで行われ、当初の予算は二十八年度から三ヶ年の継続出費で四八、六二一円余（うち土地買収費を含む）を見込んでいたが、経済界の変動によって予算を大幅に上廻り、工費総額は六一、四四六円余（うち土地買収費一六、三一九円）にのぼったといわれる。



新校舎は鬱蒼たる本多の森を背景に武家屋敷の土塀が続く旧藩の重臣本多安房守家中の屋敷町に位置し、広坂から南に走る下本多町の細い通りに用水が西に屈折するあたりに細い菱目格子の扉をつけた意匠の門があり、門内右手の門衛所をおおうように柳の老樹が枝を垂れていた。木造二階建の校舎は北館と南館に分かれて並立し、その間に生徒控所、講堂、体操場の三棟が設けられ、校地面積は七六五七坪、校舎建坪は一、二八一坪を算えた。現在泉丘校舎が敷地一四、一四六坪、旧校舎建坪一、七三七坪に比べれば如何に狭隘であったかが知られよう。

明治三十年十二月より昭和十二年までの四十年間、金沢一中校舎として親しまれてきた本多町のあたりは校舎が現泉野出町に移転してから四十五年を経た今日では面目一新、変貌し往時の校舎のあとは新しい施設が建設され、当時の付属運動場のあどには観光会館が威容をあらわしている。現在、当時の一中校舎の面影をさがし求めることは困難であり、僅かに大通りの中央に残された一本の栂と二株の松、そして背後の奥深い木立だけが往時の学び舎を偲ぶよすがになっているに過ぎない。

まことに隔世の感をきんじ得ない。

「一泉」第八号によせて

泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて（5）

蓮如上人と北国

山森青硯

（一中三十三回卒）

「蓮如上人と北国」と云う書物が、泉丘校書庫内、多くの稀観書に混って挿入してあった。是は名僧石川舜台師著であり、四六本、大正六年四月廿日刊、約二百余頁の小冊子である。舜台師の著作中、寔に貧弱装釘本である。然し乍ら師百点に余る著作中、唯一点の郷土史書であった。

此の書が我が郷土史書として最も特異とする処は、次の三点に絞りたい。

1、「蓮如上人吉崎居住以前の加賀」項中、五十六部落悉く、其土豪を列挙してあること。

2、「上人の人格」項中子息二十七人悉く所載し、一々解説をほどこしてある。

3、「結論」項中、自金沢至東都鉄道敷設の件、今日で言う北陸新幹線の事を述べる。

本書発刊以前の蓮如並に一向一揆本は極めて少数であった。特に我が郷里加賀のみの土豪を、かく迄に抽出して蓮如の本論にうつっている。此の一項だけで加賀の動揺が一目瞭然と読者に映ずるであろう。百万の喋々を並べるより、主眼を覚るのに便利である。「上人の人格」項に

二十七人の子女を有したる上人は、意外にも一夫一婦也。世上或は多婦にして閨門の不整斉なる、或る幾人の妾ありしやを憶測する者あるが如くなるも、之を査覈すれば夫人の死亡の為に継室を入れられたるに過ぎずして、妻妾並存の如きは、上人には無き所なり。

とある。以上の如く、妻妾並べ置かれし事実全くなし。あまつさえ、上人吉崎御滞在中、年間は妻妾共に存せず、是れだけでも閨門の粛整なりしを知ることが出来よう。紙面の関係上二十七人の列名出来ないは残念であるが、第二十三番目男子が有名な実悟である。此のかたの下に左記註記がある。

兼俊　本泉寺蓮悟養子願得寺住持

実悟記の著者　天正十一年寂　九十二歳　明応元年生上人七十八歳

とある。然かも実悟は上人二十七人の子の中にて最も秀である。のみならず実悟真宗立ち始って以来、最も優れた学僧であった。果物は初物と云い一番成りは一番尊ばれている。然るに実悟廿三番目の子息である。そして最も秀とは如何であろうか。

近時我が金沢四百年を不当とし、新進は金沢五百年に謳歌している。決して占領者を褒るのではないが、結局其後継者の施政如何によるのである。同じく一九一頁に

加賀動もすれば百万石の旧大藩を誇る。何ぞ知らん。吾人の祖先は協同合力して外難を攘ふの念なく、為に佐久間盛政の為に全国を奪取され、孺子をして名を成さしめ、前田利家を主人公とするに至れり。前田氏は外来の人也、我は彼に占領せられたる也。前田氏は栄誉也。然れども吾人は恥辱也。前田氏の政其宜しきを得て、吾人は十世三百年其治下に生活せり。其恩義は感謝せざるべからず。然れども被占領者なる吾人が占領者を謳歌するは、吾人祖先を罵るに近し。自ら忸怩たらざるを得んや。

とある。舜台師は前記の欠を補うために、和協合同せなければならぬと喝破してある。即ち我の長を以て他の短を補い、他の長を以て我の短を補う。そして彼比相補うて初めて完全を得ると。然るに加賀国人の特性として旧習割拠各立して、前記相補うことをなさず、其地形と共に固守、因循の個性が今日迄続いたのであると。其因循なる遠因を左記述べている。

按ずるに、此原因を為す者三あり、一に曰く地形、二に曰く海港、三に曰く雨雪、所謂地形は東南に白山立山の山脈峰嶺蜿々として全国の東南を屏障し、西北は日本海に臨む。両京は勿論何の国に至らんとするも、南は越前を経、北は越中を経て、迂回幾十里を徒渉せざれば目的地に至ること能はず。此山形は加賀の東南大屏風を作り、大屏風を以て囲掩して日本の表面、即ち東海東山の諸国より西北に逐窘せられて、隠居的天地に造られたる者の如し。

所謂海港とは加賀に良港湾なく、海浜は尽く沙汀にして海に注入する河口の如きも、海沙の為に推積埋湮せられ、僅に漁舟の出入に便するに止りて巨船は如何共すべからず。況や幾千噸を算する大火船をや。しかのみならず加え冬期の西北風は波濤洶涌人をして畏縮せしむ。夏期と雖も、日本海は太平

洋面の穏泰なるに比すべからざるをや。

所謂雨雪とは、雨量甚だ多くして随って降雪甚だ深し。比三原因の第一第二は国外へ出るを喜ばざるの性情を造る者にして、第三は隣里比屋をも往訪を好まざるの風気を為す者とす。而して是皆自家自村を唯一の天地として、小区域に甘んじて、他の至大至広の天地あることを思はざらしむる者にして、此天地の間に生育して百世の遺伝性を為す。国人を挙げて国外に出るを喜ばず。此中に生れたる小豪傑小英雄一村一庄を占めて、此小区間に跳梁して其処を得たりとす。地勢海港雨雪の此気を養成すること数千万年、終に此割拠各立の風を成して以て今日に至る。

とある。是程うまく北陸の地勢と人情を描写した文章筆者見たことはない。先見者舜台いち早く京都本願寺に入る。日本仏教を世界の仏教にすべく、明治五年渡欧をこころみた。此れ真宗僧侶の欧州行の嚆矢であった。師は今日の政治家の如く、抽象言辞ではなかった。次項で其の具体案を述べてみよう。

之を征服するは一、犀川の沿岸を経て倉谷に至り、倉谷より大隧道を開鑿して飛弾より美濃に出る也。此鉄路を成功せば加賀人初めて日本の隠居種族たるを免るべし。（中略）猶ほ更に考うるに倉谷より隧道を造るよりは、小立野は日尾の上なる高尾山（富樫の高尾に非ず）より連続せる山頂の遙に走りたる者なれば、小立野より土清水、鷹栖、菅池、駒帰、寺津を経て、日尾二又を過ぎ、赤堂山より猿ヶ山大獅子山の間を出て、赤尾町に出れば白川は指顧に在り、此路は山頂を経過する者なれば隧道を要するは少く、赤堂山は比較的大隧道を要すべし。

ロッキー山頂を通過するパシフイク鉄道の例によれば為しがたきに非ざるべし。

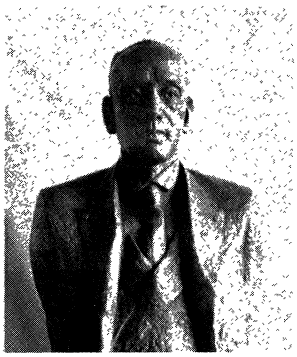
とある。舜台師犀川鴛原の産、前記地勢は熟知の人。明治渡欧帰途、法主松本等は直通で帰朝したが、舜台、成島柳北二人はアメリカ経由帰朝した。是れ前記ロッキー山頂通過パシフイク鉄道を研究したかったからであろう。彼の出生は六十年早過ぎた。

時の総理大臣大隈重信、彼の抱負を愛し、文部大臣の就任を要請した。舜台答えて曰く、「総理ならば就くが、文部大臣は否」と。舜台昭和六年歿す。享年九〇歳。英傑を生んだ金沢、今北陸新幹線で悩んでいる。

富田初代校長の胸像が完成さる

来年に迎える母校創立90周年記念事業の一環として計画された初代校長富田輝象先生の胸像が、この程半年がかりで完成され、学校に送られてきた。胸像は高さ約75㌢で往時の先生のお姿を彷彿とさせるものがある。

来年の十月十五日の記念式の際に、盛大なる除幕式が計画されている。



初代校長　富田輝象氏胸像

一泉短歌

フラメンコ

赤井直恭（一中三十二回卒）

洞窟の白壁を背に踊る娘の細身の肩にライトまぶしき（82・12月グラナダにて）

髪ながきジプシー娘の白き肌　ライトに映えてあえかなムード

タップふむ少年の脚しなやかに穴倉舞台に楽の音こもる

ジプシーの踊子たちは楽しげに私語かわしつつけふも踊るか

アランブラの回想曲をひくひとは八十翁ときく花やぎの夜

地の果てとふロカ岬にわれたちてアフリカのかた荒波を追ふ（リスボン郊外にて）

崩れかかる白壁の家　石だたみ迷路に遊ぶ子らの嬌声（リスボン・アルファマ地区3首）

道尽きて突然ひらく窓の扉に老婆はたてりにこりともせず

哀愁のこもれる町よ夕ぐれて紙屑がまふなつかしきかな

陰湿な石の小部屋の僧堂に自耕といのりのくらしを偲ぶ（カプシュシュ修道院）

同窓の随想

陰徳

飛永甚治（一中第二十一回卒）

春陽来復、老閑の一日一中同窓会誌第六号が寄贈されてきた。一瞥すると中堂観恵君の「第二十一回卒業の面々」と云う懐旧談があった。彼氏は少年時代から俊英であったが、私とはよく馬が合ったと云うか、いろんな交友のエピソードがあり、おたがい爾汝の交りでもあった。

それは大分昔のこと、昭和十五年の暮頃のことらしい。なんでも彼が本職の海軍々令部の要務で仏印のハノイに滞在中、ある日フランス軍の飛行場から電話があって、

「日本の代議士数名が、ようよう此処まで辿りついたが、もうこの先きは所持した旅費全部を使い果して困っている。なんとか処理してほしい。」

とのこと、全く藪から棒のようなことであった。

中堂武官はつらつら想った。時局の進展に伴って東南アジア諸国の向背がわが日本帝国の存亡に重大な影響を及ぼすことを考慮して国内の有力代議士が現地視察に赴き、そのあげくのはてのことであろう。これはすてておくわけにはいかぬと考えた。そこで、副官を派遣して一行を出迎え、それから数日の間、日本人旅館に滞在させ、附近の視察、見物をさせ、海軍の飛行機で内地に送り届けたという始末であった。この一行の中に石川県出身で九里長次という代議士があって、中堂君のことを知っていて、こういうさいかくが働いたものであろう。

そのあと中堂君は軍令部に帰り戦争となり、りゅうりゅうたる地位となったが、この話はこれでフィナーレではない。私の深く感銘した後日譚があった。

あの忌わしい敗戦後の吾国は、この価値観を一変させてしまった。中でも世の中の人情と云うものが薄紙のようになった。曾ては功績のあった方々にもひとしお冷たい行住座臥があったようである。ある日ある時、中堂君が都電の中で思いもかけない人から声をかけられた。

「中堂さーん、まあお達者で。」

それはかつて仏印で遭った代議士の一人、赤城宗徳氏であった。人ごみの電車の中であったから、普通なら通り一遍の挨拶ですましたことであったろうが、わざわざ人ごみをかきわけて近より

「あのときは大へんなお世話になりました…。お互いに苦労をしますなア。」

あいさつをかわしたということである。因みに赤城代議士はそのとき追放になり、浪々の身であったのである。

その後、中堂君は職を失っていたが、赤城代議士が再び代議士に当選するや、その事務所の一隅に腰をすえて代議士の手伝をすることになり、国策の研究、赤城氏の日本古代史の著述等に手伝うことになり、米塩の資を得ることにもなったという。

私憶うに、人生袖振り合うも多生の縁とやらさえいう。まして、准南行子にいうように

「陰徳あれば必ず陽報あり。」

というが、まことにそのとおりである。

桜美会員　大蔵吉夫氏（一中47回）

同窓、先輩よりの著書のご寄贈

前号に記載した先輩よりご寄贈の著書に引き続き、次の各先輩よりそれぞれその著書のご寄贈をいただきました。

将来の一泉文庫の資として有難くお礼を申し上げます。

◎大場芳朗氏（一中三七回）
加賀藩政秘話「天保義民物語」

◎青戸泰賢氏（一中三八回）
金沢春秋「回想の余録」

◎松田久子氏
馳けぬけた日々
「松田一久遺稿集」
（一中四八回）

◎元地　健氏（泉一三回）
紛争予防のための
「弁護士活用法」

◎村　又吉氏（一中三三回）
野戦予備病院物語　第一集
野戦予備病院物語　第二集
野戦予備病院物語　第四集

◎板垣吉兵衛氏（一中三五回）
石川県弓道30年史

◎冨沢友治氏（一中三二回）
一小学校教師の記録
「未完成の自覚」

◎小川忠男氏（一中四九回）
金沢二中・錦丘高校校史

一人の先輩の死

南　秀男
（一中四十一回卒）

大正十三年卒業の根岸巌さんが昭和五十八年四月一日午前〇時に亡くなられました。私はこの根岸先輩とは一面識もなかったのですが、一中から四高、東大を出られてNHK、富士通の幹部になられ、最後はエレクトロニクス協会の専務理事を勤めておられた大変立派な方です。「〇〇〇〇」等の著書も二、三冊出しておられます。実は昨年同窓会の事務局長西多さんから、誰れか「一泉」の投稿者をと頼まれまして昨年二月頃、根岸さんにその旨の手紙を出しました。その時返事が来ましたのが奥さんからのもので「主人は目下病臥中で伊豆の慶応病院の分院でリハビリ中ですが四月頃には千葉の自宅に戻って来ますので次号には執筆します」と。

私は日を置いて五月に同窓会事務局としてあらためてお見舞状を書き金沢のお菓子（坂尾の加賀さま）を送りました。それから間もなく、又奥さんから事務局の西多さんのところに電話がありまして「主人は伊豆から自宅に帰り一時小康を得ていたのですが六月三十日突然に危篤状態になり江戸川病院に入院しました。今までは殆んど食事も充分にとらず身心共に絶望的と考えていましたところ南さんから郷土の菓子が届き、本人は金沢の地が懐かしく最中を一口食べたところ俄然食欲を覚え只今稍々元気回復の態で食事も採るようになりました。全く南さんのお蔭と喜んでいます」と大変に感謝されました。先輩への励ましの言葉と小さな善意でどんなにか病気で伸吟中の根岸さんが勇気づけられたことかとうれしくなり、私はいいことをしたなァと思いました。

それからずっと今はどうしておられるかなァと根岸さんのことを案じながら夏が過ぎ秋冬も過ぎ、又と云う得る春を迎えたこの二、三日前、今度は根岸さんの息子さんから私の自宅に電話があり訃報を聞きました。もう一度お元気になられお逢い出来るのを楽しみにしていましたのに痛恨の極みであります。

（五八・四・五）

若宮八幡宮お田植神事

宇野　通子
（通信十四回卒）

お田植の苗籠担ぐ天秤棒
唄方の萌黄の袴田植祭
田植唄菖蒲の風に乗りにけり
薄暑にて神田を植うる後ずさり
早乙女の後ずさるとき泥匂ふ

新々校舎の完成

金崎　肇
（一中四十七回卒）

先日久しぶりに学校の前を通ったら、赤い瓦葺きの屋根の新校舎が殆ど出来上っているので少々驚いた。随分ユニークな建物が出来たものと思う。女生徒が入学している為であろうかと考えたりした。

われわれのクラスは三年生の時、本多町のオンボロ校舎（現在は社教センターと観光会館になっている）から泉野の新校舎――畑の中にポツンと建ち、遠くからその威容が眺められた――――へ引越しをしたクラスである。引越し前には何回も掃除に行ったし、グランドや建物周辺の草むしりにも行ったのをよく覚えている。昭和十二年の夏のことである。

そろそろシナ事変が解決せぬままに泥沼に入りかけ、世の中が次第におかしくなってゆく時であった。新校舎へ移った時は、春になると生徒はハダシにさせられたり、階段を上る時は海軍式に二段ずつ上るよう強制されたり。陸軍記念日（三月十日）や海軍記念日（五月二十七日）には、銃を持って武装して護国神社へ行進し、「捧げ銃」の礼拝をしたことなどを思い出す。

卒業してからは私は金沢に居なかったので、その後の金沢の様子は余り知らないが、「新校舎」は引き続き泉野の台地から、敗戦時の混乱、次第に都市化が校舎まで迫ってくる下界の世相の変化を眺めて来たことと思う。一方では、その名も金沢一中、一高、泉丘高校と変って来たのを、「新校舎」は知っているであろうし、黒い木綿にゲートル巻の生徒が、次第に国防色の制服になり、戦後は土足で上るようにもなったり、薄汚い乱れた服装に長髪の生徒も知っているであろうが、何より、女生徒が入学して来たのを見た時には一番驚いたかも知れない。

以来四〇年、世の中はすっかり変ってしまった。私も卒業以来四十三年経ち、還暦の年になってしまった。今更古いことを持出しても若い人々には笑われるだけであろう。「新校舎」も四十六年ほどの一生を終え間もなくこの世から消えようとしている。「新々校舎」はこれから、どの様な一生を歩むことであろうか。

西ドイツ便り

西多邦夫
（泉十二回）

五月初旬再度のドイツ旅行をする機会を得ました。数日間ホテルと民家に宿泊し私なりの感覚でドイツとドイツ人を色々の面で再発見できた思いがします。

春のドイツは辺り一面花が咲きみだれ、お花畠の向うに教会の塔を中心に中世風の村々が点在し、場所によっては更にその向うにアルプスが遠望できるという素晴らしいものです。

日本は明治維新以来、様々の社会制度や科学文化の面でドイツに学んできた訳です。乃木希典、森欧外、芥川龍之介、滝廉太郎、その他多くの日本人がそれぞれの分野でドイツに留学したときました。法律や教育制度も戦前のものは殆どドイツが範のようです。

ドイツ人は頑固で几帳面な民族です。終戦後の日本は総てアメリカナイズされましたが、ドイツ人の頑固さは流石で同じ敗戦国でありながら旧態は努めて残すよう頑張ったようです。一例として教育制度、ドイツの学校は日本の戦前の制度（日本が真似たのですが）小学校、中学、高校、大学と分れてはいるのですが中学へは大学まで行く者しか進まず、殆どは商業、工業に当る技術の専門校へ進み社会へ出て行きます。従って大学は全国で48校しかなく総て国立で、この数は中世から変っていないそうです。一校一校の歴史はすごく14～15世紀頃の創立のものばかりで、この大学はゲーテが学んだとか、シラーの母校とか気の遠くなるような古さです。

生活の面、つまり衣食住についてもドイツと日本の違いが痛感されます。日本は衣食の両面は世界の超先進国ですが住は逆にかなり遅れていると思います。ドイツは衣と食は質素というより、むしろ粗末なと云った方が適当な位ですが住に対する投資には目を見張るものがあります。どの家も大小に拘わらず清潔で重みがありよく整頓され素晴らしいの一語です。よく男の人生の理想は「アメリカ風の家に住み、日本人の妻を持ち中華料理を食べる」ことだと云われていますがそれにもう一つ「ドイツ人を女中にする」が加わって完璧なんだそうです。ドイツに来て聞いたのですから本当なんでしょう。

ドイツは西欧では唯一の親日国でしょう。中年以上のドイツ人は総じて日本と日本人好きです。バーなどに居ると必ず「日本人か？」と話しかけて来ます。「そうだ」と答えると「よかった、ひょっとすると中国人かと心配した」と云うのです。中国人は抜け目がなく油断がならないから嫌いだそうです。彼等は世界最優秀民族はドイツ人と確信しています。頭脳と技術的な面では、日本人はドイツ人並と認め肉体的面の差だけドイツ人の方が総合的に優っていると結論づけています。ドイツだけが生産し得ると考えていた様々な精密機器分野も日本だけは例外であり今やドイツにはカメラメーカーはないと宿の主人グリープさんが嘆きます。ニコン、キャノン、トヨタ、ホンダ、パナソニック、ソニー…サイコーと言うので、最高なんて日本語を何故知っているのか、よく聞いてみると時計のSEIKOのことでした。ドイツ語はEIはアイと発音するのです。大笑いしました。

以上、思いつくまま書きなぐりました。お陰で最良の季節に最高に楽しい旅ができたことを感謝します。

全国相撲大会の記録

今年もまた第67回全国高校相撲大会が去る五月三十日、金沢市卯辰山特設会場の相撲場に於て開催された。

母校泉丘高校も67回連続出場の伝統を守って出場。当日は全国でも指折りの進学校の函館ラ・サール校と団体予選一回戦で対戦、土俵と机の両立をめざす心・技・体をぶつけあったが、対戦ではラ・サールが全勝。泉丘は今ひとつ力を出し切れず完敗に終ったが、土俵を引きあげた両校チームはガッチリ握手を交してエールを交歓した。

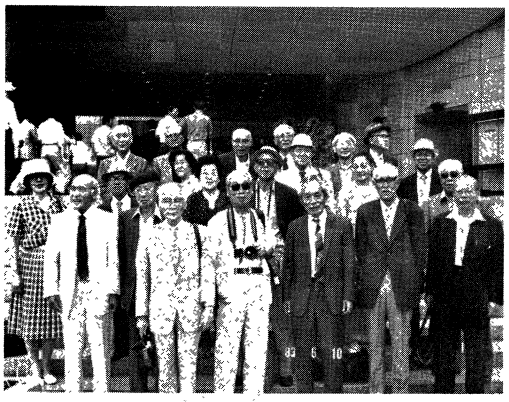
泉丘では相撲部は健在というものの（体格に恵まれた選手が入部しない」のが悩みで「継続は力、来年も必ず出場します」と意気は盛んである。

同窓の集い

◇五十八年度・一中十三年会 総会の記

吾々は一中、第三十一期大正十三年の卒業で、一中十三年会と称し毎年会合を重ね、友情を深め、激励し合い、余生の楽しみの一つとしている。

今年は東京在住の清水、粟田、橋浦、谷本の諸兄を幹事当番とし、熱海後楽園ホテルを会場に企画された。現在会員数四十五名、出席者十九名、他に同伴夫人等四名、計二十三名となり、会員出席率にして四割二分。吾々の年配としては上々の方と云わねばなるまい。



去る六月九日二時、新幹線熱海駅に集合、全員タクシーに分乗、約十分で会場後楽園ホテルに到着、休憩。四時頃より総会を開き六時より懇親会に移る。宴たけなわともなれば、熱海の美妓連中のサービスにつられ、歌や踊りの熱演に壮者を凌ぐ旺んなものあり、盛り上がり一入にして、一年振りの再会に懐旧談も尽きず、歓を尽くし明年度は地元金沢を当番幹事とすることを決定、閉宴す。

翌十日、朝食に先だち、母校創立九十周年記念事業の募金の件につき説明し、賛同を求めた処、出席者全員応諾の成果をあげた。

○寄付応諾者氏名

橋浦彦三、山本尚正、谷本義盛、岩田繁雄、平井良太郎、小谷一男、広瀬賢吉、梅田助松、堀田武俊、兵地富太郎、粟田添星、山科清栄、松本芳景、藤田秀一、清水俊雄、村山勝次郎、飯倉薫、以上十七名各一万円宛、小島鋼（後日送金予定）計十七万円、他に欠席者中、寄付応諾の者、高島弥生、安井睦美、宮田千代松、北村三郎、以上四名各一万円宛、計四万円、総計二十一万円となる。

十日九時頃ホテル出発、一同MOA大美術館を参観した。ここには国宝級の豪華な名作が多数展示されており、大いに感銘し、全員玄関に整列、記念撮影をし、十一時半頃、来年の再会を約し各々東西に袂をわかった。

（五八・七・三〇　村山記）

◇関東三十二期春のクラス会

一中三十二期卒の関東春のクラス会が五月七日、東京・練馬・豊島園内の池畔亭でひらかれた。午前中、かなりの雨が降ったが、開宴の一時半ごろにはすっかり晴れあがり、庭の池に緑が映えて美しい。

めて歓をつくし、夕刻散会したが、いつもこの会に尽力してくれた北村道四郎君が、この二月になくなり、さびしさを禁じ得ず「朝々、花は遷り落ち　歳々、人は移り改たまる」の感をふかくした。写真（本部均君提供）前列右から泉谷、赤井、柴田、後列、本部、瓜生、中村、相馬、下村、松林の諸君。

（一中三十二回　赤井直恭記）

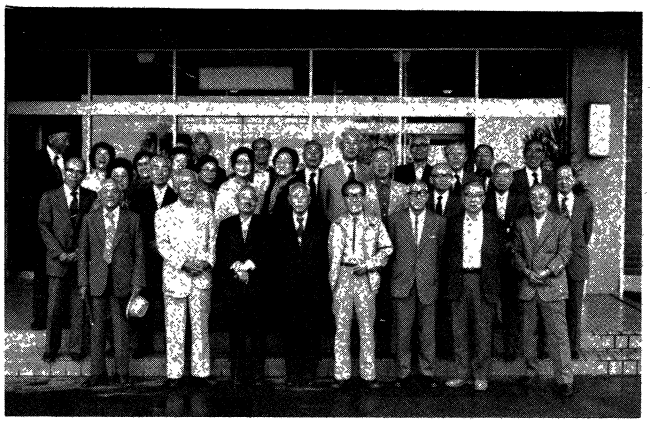
◇第11回金沢一中三三会大津大会

大正最後の卒業生、一中三三会が今年は関西当番で、去る15、16両日、琵琶湖畔大津の地で催された。

大会は関西を代表して、松本君の開会の挨拶に始まり、次いで地元の藤田から会員並びに母校の近況報告と併せて、来秋に迎える母校90周年記念行事につき、協力方依頼あり。

集う会員27名、同夫人ら7名計34名。互に久濶を叙すると共に、例年の如く宴後も時を忘れて懐旧談に花を咲かせた。

翌日は相憎の　小雨で、多少の難渋はあったものの、午前中びわ湖汽船で近江八景廻り、堅田の浮見堂、瀬田の唐橋、石山寺等を見学して、浜大津センターで昼食を共にして午後2時、来年の金沢大会を約して解散した。



参会者次の通り。

安藤憲雄、同夫人、同令嬢、井口政雄、同夫人、伊藤進、石田聖、同夫人、岩城谷博、宇都宮亮一、小寺俊一、岡田一男、同夫人、川西弘晃、小林利喜松、近藤師家司、田中嘉太郎、俵正、辻義雄、西村四郎市、藤田誠一、同夫人、松本正雄、宮村外雄、村又吉、村尾泰、村上外雄、免田良太郎、安田俊雄、山田義墾、吉見外武、和田光、同夫人。

なお安藤君は夫人、令嬢の介添で、歩行困難をおして参加されたことを付記する。

（藤田記）

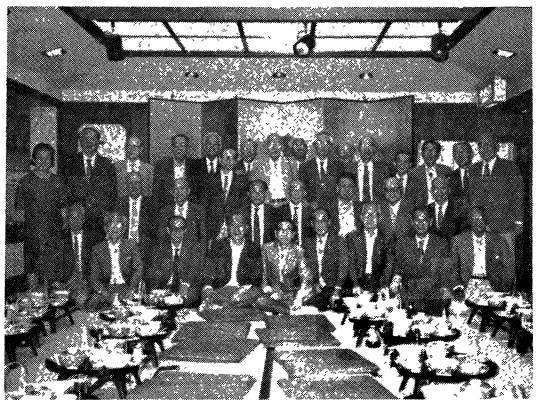
◇三五会のつどい

昨年は秋口になったが、ことしは早く開けとの声に応じて年一回の例会を五月二十八日㈯ホテルニュー金沢で開催した。毎年出席していただいた鏑木先生のお姿が見られなくなったことが皆一様に寂しかったが、四時からの会合は八時まで話に花が咲いて楽しく賑やかなものとなった。

出席者は次の三十一名、出席できず回答のみあった者三十四名、音信のない者十三名、物故者は卒業時の半数八〇名を数える現状はお互いに年齢を感じさせるものだった。

当夜の感興――「本多の森に…の歌うたいつつ七十を楽しむ」

（大森玄衆記）



当日出席者

浅地忠、居村喜久治、市島亀太郎、板垣吉兵衛、牛塚巌雄、内田暁太、大浦喜三郎、大滝武雄、大森玄衆、笠野外喜夫、梶本国男、小坂音次、小林敏雄、越田喜久治、嵯峨通夫、篠原一恭、杉野啓、出口一彦、南部貞一、野村忠、橋本次、畑中善三、広瀬清浩、福岡志良、福田重一、松井順孝、松島譲、杓尚雄、安江四郎、結城与久、脇水利勝。以上三十一名。

◇六桜会ひらく（三十八回）

このほど昭和六年卒で組織している六桜会では、東京から四高会に出席し帰省した安原二郎君を迎えて急拠臨時の会合を設けた。

今年で七十歳を超えた会員は、何かことあるごとに会合することとし、今回もすばやくこの機会をとらえた会合となった。安原君を囲み談論風発、友の近況から政治、教育、経済等、何の遠慮もない昔の学童にかえっての談論、秋の夜長の一時を過した。（十一月六日　於とよ島）

顔をそろえたメンバー

内田隆元　安原二郎　加藤俊男
伊藤正保　大川兼夫　小坂外喜次
高堀勝喜　永井正三　西多外喜次
前田又久　松本　猛　若林　文一

（西多記）

◇一中四十九期会報告

師走の多忙のなか、十二月六日魚半にて同期生会を行った。

かねて御存知の金沢香林坊再開発事業が漸く軌道にのり、私達が紅顔の頃より親しんだ魚半かいわいが取り壊されることになり、新しく生れかわることを記念し、少年の日のノスタルジアに一夕集まりました。

その上私達同期には当再開発事業に縁の深い方が多く、ちなみに第一街区理事長は金沢市助役尾戸嘉博氏、第二街区のキーテナントは大和であり、岡田虎二氏は大和の専務取締役です。又第一街区の監修、第二街区の設計は釣谷利夫氏（㈱釣谷建築事

務所社長）が担当し、此処に店を構えるポーラの小川忠男氏は第二街区理事並びに諮問委員長をつとめております。

ここに私達は、来春姿を消す魚半において歓談を尽し、併せて来年度の母校九十周年記念事業の成功を祈りつつ会を終えました。

〈出席者〉石川元一、石田直行、岡田虎二、尾戸嘉博、小原幸夫、荒川正、上野方弘、釣谷利夫、千田実、斎藤弥吉、橋本外清、坂尾重光、砂川省介、竹林良雄、西村進、藤井明、山上俊夫、橋場一之、八木秀夫、平松昌司、松浦秀一、山村義一、浅村一二、石野嘉男、宇野良一、小川忠男、北川孝、高見隆、中島茂樹、野村成紀、宮崎正孝

以上三十一名　（斎藤弥吉）

金沢一中八桜会
湯涌で全国大会

金沢一中第四十回卒業生（八桜会）による卒業五十周年記念全国大会は九月十八日、恩師宮沢先生を含めて総勢五十二名参加の下に金沢湯涌温泉白雲楼で左のように盛大に開催された。

初日十八日は誠に幸先よく素晴らしい快晴に恵まれる。午後二時、幹事等数名早くも会場に駈けつけ受付、部屋割等の準備おさおさ怠りなく、定刻午後四時近く、相次ぐ参加者一人一人に先ず受付で記念品としての桜章入りの九谷焼ループタイが手渡される。各部屋のあちこちでは五十年振りの友との再会に固い握手を交す光景も散見されて、独特の大会気分が徐々に醸し出されて行く。

午後六時、いよいよ待望の大宴会、部屋は白雲楼ご自慢の「医王の間」小堀幹事の司会で先ず地元県議西森金市君の歓迎の言葉を皮切りに福田尚造君の先導で物故会員に捧げる敬虔な黙禱がこれに続き、川島重男君乾盃の音頭で宴会に入る。

程なく関東、関西の代表福田正次郎、八十島健二の両君よりそれぞれ喜びをこめて丁重な挨拶があり、会場は一段と和やかな雰囲気に包まれる。

白雲楼お抱えの綺麗どころのしっとりとしたもてなしに加えての山海の珍味に酔いは程よくまわり、宴はいよいよ酣となるも、午後八時三十分、大村孝一君の万才三唱、続いて箕打正寿君の閉会の挨拶で一旦休憩、「万才は散会に非ず」の言葉どおり宴は尽きることを知らなかった。予め準備された別室の第二次会場へと移動して更に続行される。何分、殆んどの会員が入れ代り立ち代りのご入来でその賑やかなこと、我も人も期せずして紅顔可憐の少年時代にかえり、膝を交えての歓談は深更に及ぶもなお尽きなかった。

明くれば十九日、昨日に引き続き絶好の小春日和、予定の日程に従い先ず江戸村及び檀風苑をゆっくり見学の後観光バスに便乗、思い出多き一中校舎跡、本多が森界隈を最徐行で経由、兼六園見城亭で昼食、郷土の味、甘えびに舌鼓を打つ。

天下の名園鑑賞後再び乗車、泉丘高校厳霜碑前で記念撮影後新校舎見学、設備の素晴らしさに感嘆と同時に今昔の感一入の思いで辞去。

以後の車中は福田正秋君得意の名調子によるバスガイドよろしく談笑の裡に市周辺の新しい交通路を通り一路金沢駅へ、やがて駅頭に近づく頃、小堀幹事の別れの挨拶を兼ねての「蛍の光」と、英幹事の音頭による高らかな万才三唱の唱和に一同万感胸に迫る思い。

午後三時、予定どおり金沢駅到着、解散、再会を期して三々伍々帰路につく。いつまでも心に残るであろう誠に意義深く楽しい二日間の全国大会であった。

（小堀　広記）

当日の参加者

関東・東海方面

石崎文雄、坂本登、小川正彦、田中正能、角尾順三、谷内上、中島道夫、渡辺六郎、森田正典、三上修三、福田正次郎、三津谷達雄

関西・山陽方面

小林良夫、坂伊之助、千田民夫、水落昇、八十島健二、八牧力雄、高橋義雄、辻弘文、勝木龍猪、能木場俊吉

北陸方面（富山・石川）

織部道雄、沖野永光、中一良次、土屋紀一（以上富山）

山本尚忠、本村尚、宗広金太郎、箕打正寿、三谷実、英勝雄、福田尚造、小堀広、大島喜久男、橋本俊一、野村潔、数沢亮、西森金市、相川実、成瀬清次、中島正肇、高崎辰夫、小松英吉、大村孝一、大沢正夫、栗野利雄、浅井東弘、川島重男、福田正秋、紺谷良一（以上石川）

◇一中46期会東京支部クラス会

我々の期の在京者クラス会が57年11月26日に行われました。幹事の村井又兵衛君のお世話で、日比谷の東宝三番街ビルのなかの会員制クラブ「カティ」で午後六時から十時まで借り切って、カラオケまで準備してくれました。

スペシャルゲストとして竹内ゲルマン先生をお迎えするとのことであったし、私にとって卒業以来はじめて顔をあわす人の出席もあるというので、久し振りの上京を機会に出席致しました。

ゲルマン先生はご老体で低血圧症とかで大事をとられ、残念乍ら出席されませんでしたが、会する者27名（別添の写真）の署名には25名しかありませんが、他に納賀、坂本君出席――。

「熟年について考える」という中谷君、「ソ連圏外交官の体験から見る国際情勢」西田勝治君の談話などを交え乍ら、もう停年で自適生活に入る人、まだまだ現役で頑張るという人、互いに旧交を温め、想い出を語り合って話は尽きず、カラオケを使うどころか十一時すぎまで時間延長しての誠に愉しい集いでした。

（寺内記）

◇金沢一中第47期同窓会
錦秋の京都にて開催

紅葉のきれいな十一月五日（土）夜、関東7名、関西7名、北陸11名、恩師後藤重郎先生を含め計26名が新装の「京都パークホテル」（三十三間堂隣）へ集った。後藤先生は不自由な身をおしてご子息夫婦やご家族に支えられ、教え子の顔を見たいとわざわざ兵庫県川西市から馳せ参じて来られたが、かつての懐しいあのサイレンの大きな声も聞けず、宴途中から帰られたが、病気を押して参加された先生のお姿に感動さえ覚えた。

関西の木村和義（加藤運輸㈱社長）の司会で森沢正夫（大阪機工㈱社長）の地元挨拶、後藤先生の挨拶に続き一泉同窓会常任幹事の大蔵吉夫（㈱北陸航空社長）の明年の90周年記念行事等の報告があり、その後関東、関西、北陸の各人の近況報告があった。㈱東レの副社長に昇格した前川伸も至極元気で大阪から東京へ移ったとのこと。43年ぶりに出席した木村博も一中時代の懐しい写真を持参して参加した。6名の夫人同伴者も明日の日曜日は錦秋の京都奈良見物に、永年の苦労をかけた女房どのを慰めるため各々工夫をこらしているようであった。「既に病床で悲しくもこの世で同級生の諸君に再び逢えぬと思えば……」という返信もあり、東京の中川智雄が、わざわざ翌日豊中の病友を見舞った。

なごやかなひとときも過ぎ、最後に同級の国会で活躍中の坂本三十次代議士の祝電が披露され、金沢一中校歌を全員で斉唱し、暮れゆく秋の秋の京都の名残りを惜しみ解散した。

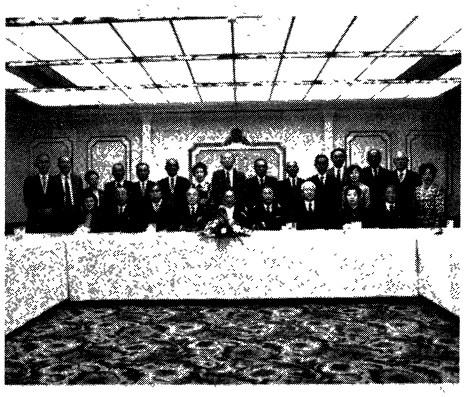
（大蔵記）

◎出席者

（関東）池保、杉田賢四郎夫妻、辻沢七郎夫妻、中野喜代二、中川智雄

（北陸）飯田久、大蔵吉夫夫妻、大谷渉、大屋信之、垣田生知、清水誠三夫妻、浜屋芳次妻、松林禧作

（関西）木村和義夫妻、木村博、前川伸、元田隆、森沢正夫、水島博



◇一中四十二期生（昭和十年卒）

十桜会総会

恒例の第十二回総会を去る十月十四、十五の両日熱海の起雲閣で開催した。

御出席予定の後藤先生御夫妻と斎藤先生の突然の御都合に依る御欠席で恩師は藤田誠一先生お一人だったが相変らず若々しく御元気で会も一段と盛り上った。本年は金沢大学を今春そろって定年退官した医学部の梶川欽一郎会長はじめ教育学部の新保彦四郎、教養学部の室木弥太郎の三教授並びに昨年退官した工学部の吉村元一教授の金大トリオが揃って元気な顔を見せ、総員三十七名で例年よりやや少なかったが一方夫人同伴者が年々ふえる傾向はやはり年のせいか熱年の弱気と思いやりの心根が偲ばれて頼笑ましく、会も一段となごんで今後も大いに歓迎されることだ。

総会は関東代表古沢君の司会で先ず梶川会長の挨拶。久保田関東幹事の恩師と全会友の動静報告があり、又来年の九十周年記念事業の経過報告（諸江）と中側君の母校改築工事進捗状況の報告があった。続いて懇親宴に入り梶川会長の乾盃の音頭で開宴、したり顔の白髪・禿頭の老友も桜章健児の往時に思いを馳せ懐旧談に花を咲かせ、最後に校歌・応援歌を斉唱して意気大いに盛り上り盛会の裡に第一日を閉宴した。

翌第二日目は朝食後、地区代表幹事（関東―久保田、関西―福塚、中部―今井、九州―八日市屋、北陸―諸江）の各地区の情勢報告があり。又例によって明大教授西村忠恭畏友の「楽しく安直な外国航路の船旅」の奨めについて豊富な体験談を聞いた。

引続き九十周年記念事業の協賛金の募金について協議し、取り敢えず本日の出席者全員が一人五、〇〇〇円を拠出して頂き、尚欠席会友全員にも一口一、〇〇〇円とし、一人五口位の寄附を呼びかけるよう全会一致で決まった。又来秋の金沢総会は九十周年祝賀式に合せ例年通り十月十四日、十五日とし、会場その他細部については同窓会実行委員会の記念式の日時その他決定次第早急に設定することとした。

尚九十周年に照準を合せた今回の校舎新改築工事は奇しくも同期の辰村組中側尚英君（辰村組社長）が請負い、鋭意建設中であり、又記念事業である富田輝象初代校長の胸像再建はこれ又同期の堀義雄（二紀会の重鎮）君の創作になるので我々十桜会にとっては特に意義深く、来年は十桜会総会閉会後（十五日朝食後）全員揃って新装なった近代校舎を見学し、胸像の除幕式や祝賀会に出席しようと来秋の再会を約して散会した。

（諸江記）

◇一中第五十四期関東支部大会

一中第五十四期同窓会関東支部では去る五月二十一日、一泊にて熱海温泉磯辺館に於て大会を開催した。

出席者は地元組の氷田、北川、木村、渋川、松波、中村喜、村田、糸多、丸山、宮川、辻、坪野、金沢本部より板尾、山本道、吉竹が参加し、総勢十五名となった。

一別以来の会合で懐旧談に花が咲き、いつに変らぬ同窓会風景で、夜の更けるのも忘れた一夜であった。次回の開催地を未だ一度も開かれていない名古屋地区で是非やりたいと同席の松波君にハッパをかける風景がみられ、一同これに期待をかけ、再会を約して散会した。

（吉竹記）

◇〝盛夏に集う〟通信制23回卒業生

金沢一の繁華街、香林坊の一角にある喫茶店を借り切って行われた第二回の同窓会には、卒業生の過半数に達する出席者があり、先生を始め、どの顔も卒業当時と少しも変らず、ビールを傾けながらの座談会では、在校時代の感傷に浸り楽しく語り合いました。同窓会の名称も五一年度入学に因んで五・一（いち）会と名付け、来年は加賀温泉で一泊することに決まりました。定刻には来年の再会を約し、名残りを惜しみながら、真夏の街へ散って行かれました。来年は今年以上の出席者があることを期待しています。

（富沢記）

昭和58年8月28日
グラスホッパーにて

出席者
中村順吉先生、荒川寿美子、尾形幸子、加藤外志江、小谷一夫、土井洋子、道上昇、石黒陽子、野里洋子、松田康男、松田静子、山辺勝久、熊川君子、富沢紀代栄　以上14名

卒業五十年全国大会

◇一中四十一期生（昭和九年卒）

本多が森の校舎を後にして五十年の歳月が流れた。五十年は一つの大きな節目でもあるので、これを記念して編輯した同期生会誌第六号（一九五頁）の頒布をかねて左記要領により全国大会を開いた。

一、日時　五十八年十一月十一日、十二日
一、物故者慰霊祭　石浦神社
一、パーティ　金沢観光会館グリル
一、泉丘高校新築校舎見学
一、懇親会　山中温泉廳泉閣

通い馴れた校舎のすぐ近くの石浦神社で十二時受付を開始するや、続続と懐しい顔が見え、渡された記念の会誌第六号を一心不乱に読む者や、ダベリに花を咲かせる者等々、会の雰囲気は次第に盛り上って来た。やがて慰霊祭がおごそかに取行われたが、特に南秀男君が捧げた慰霊の辞には全員深く感動し圧巻であった。

次いで四十一期生会が、四十七年四月の全国大会で記念植樹した三本の桜と、その時に建てた〝我々の縁爰に始まる〟の記念碑のある本多町公園で、青春時代の思いを新たにし、一中グラウンド跡地に建てられた観光会館グリルでパーティを開いた。立食なのでお互いに自由に交流し、予定時間は瞬く間に過ぎた。ここで山中温泉の懇親会に出席出来ない級友と別れを惜しみつつ車を駈せて、張江君の設計になる泉丘高校の新校舎を見学した。ホテルかと見間違える豪華さに一同驚嘆すると共に、一中時代のオンボロ校舎に思いを馳せ転々感慨無量のものがあった。

最終会場である山中温泉廳泉閣で一風呂浴びての懇親会は、お互いに話に夢中で芸妓の踊りもゆっくり見ていなかったようである。隠し芸も出尽した処で南征の調を合唱し一応宴を終えたが、各部屋では遅くまで話がはずんでいた。翌朝は雨降りがひどく、紅葉映ゆる鶴仙渓を見ることが出来ず、朝食後自由解散としたが、各自大会の余韻を胸にいだき互いの健康を祈りつつ帰途についた。

参加者次の通り（五十五名）

青木、赤崎、伊佐、海渕、梶本、岸原、北本、小池、小泉、古賀、小鍛治、越田、近藤、佐久間、重田、庄田、杉田、高岡(精)、田形、高橋(隆)、武内、竹村、田中(喜)、柵田、谷村、土山、徳山、飛世、中栄、西田、野崎、登、橋場、英、張江、藩、平石、府玻、牧沢、松井、三浦、水本、南(時)、南(秀)、三宅、宮本、村北、安原、八十島、矢野、矢部(睦)、山岸、山口、芳田、吉本

（牧沢記）

◇泉寿会（泉十期）卒業25周年

泉丘十期生（泉寿会）は去る八月十三日（土）午後五時三十分より、六華苑に於て卒業25周年記念総会を開催した。

総会に先立ち午後二時から母校に於て、新校舎見学会を行い、鍋岡校長の挨拶、田村先生の説明を受け約一時間半に亘り見学した。

総会は定刻に始まり、藤井、庄山、八講、香村、清水、松田、釣谷、北市、吉本、新田、浅香の十一恩師に御参加願い、卒業生も百十名余が全国から集って開かれた。

今回は卒業25周年を記念して、記念文集を作成し、参加者全員による記念写真も撮るなど盛り沢山の計画を予定し、盛会の内に二次会、三次会へと夜の更けるまで「真夏の夜の夢」を楽しみ次回の再会を約したのである。

（杉野記）

◇一桜会（一中五十一回卒）同窓会

去る昭和五十八年十一月二十二日午後六時、兼六園横の兼見御亭にて一年振りに同窓会を開催した処、恩師吉田パイパン先生を始め、例年参加でお馴染みの顔や、卒業以来初めてという懐かしい顔ぶれ三十一名が参集し、思い出話や現況報告の話に花を咲かせました。

定刻になりくじ引きで定められた座席につき、先ず最初に幹事の木田君の音頭により、去る九月に亡くなった江尻君を始め、物故者二十五名の冥福を祈り黙禱を捧げる。引き続き一泉同窓会々長宮太郎君の九十周年記念行事のこと、東京大会のこと等を含めユーモア溢れる挨拶があり、その後七十八才の高齢ながら中風で多少足がご不自由とはいえ、老いて益々矍鑠たる吉田先生より、五十代は未だまだ働き盛りだから、健康に留意して今後益々頑張れとの激励のお言葉を頂戴致し、去る十一月三日文化の日に金沢市社会教育功労賞に輝やいた三浦秀行君の音頭で乾盃し、愈々開宴となる。

全員揃ったところで、ハゲ頭が多くハレーションを気にかけながら記念写真を撮影し、宴半ば佐野幹事さんより来年は卒業四十周年を記念して十一月に粟津温泉坂田屋（同窓）にて盛大に開催したい旨提案があり、全員一致でこれを決議しました。宴酣に及ぶや惜日の応援団の旗振りで「校歌」や「香雲」「桜が森」等を兼六園の夜空も裂けよとばかりに、声をからしてストレスを解消しました。

中学時代の気心の知れた友人程心温まるものはありません。お互いに励まし合いかばい合って過した五年間の友情は、何年振り何十年振りで会っても、日月の間隔を感じさせない充実感があり、これこそ真の男の友情と思われます。

名残りを惜しみ、お互いの健康を祈りながら、来年は創立九十周年と我々一桜会卒業四十周年記念を兼ね、坂田屋での再会を約束し、盛会裡に幕を閉じました。（宮林和彦記）

〈参加者〉

油野稔、粟津裕平、岩木昭一、池田文雄、今枝茂夫、太田一雄、河合栄一郎、金森義一、川原善一、木田威俊、黒川隆、小林外茂雄（旧砺波）、西能史郎、佐野豊、清水進、園部哲三、戸田幹雄、南部房雄、西村康賢、西本和夫、松本守、松本実（旧篠田）宮太郎、三浦秀行、宮林和彦、室谷与三松、本野文雄、横井衛、吉田靖、渡辺良網

新装なった新校舎正面

浅の川慕情

作詞　野本　正作（泉六回生）

一、流れやさしき浅の川
橋のたもとの白糸柳
蔭にかくれて寄り添った
忍ぶ逢瀬の春の夜
恋の金沢月おぼろ

二、紅殻格子の花街に
はかなく咲いた白粉花よ
燃ゆる想いを友禅に
染めてつとめる左褄
涙かくした　舞扇

三、窓にこぼれる月あかり
実らぬ恋とわかっていても
今宵うれしい差し向い
つまびく三味の指先に
ほろり落した一しずく

同窓会通信

◇一泉同窓会本部総会ひらく

五十八年度一泉同窓会総会を例年通りの十月十五日開催する。

総会にさきだち、同日午後三時より母校前庭の厳霜碑前に於て会員物故者の慰霊祭を石浦神社宮司の司祭のもとに厳しゅくにとり行う。新装なった校舎と共に整備された校庭に宮会長以下集り、玉串奉呈をなして慰霊の行事を終える。

続いて午後五時より総会々場を金沢ニューグランドに移して総会を開いた。小川副会長の司会で開会、宮太郎会長が「来春の講堂完成をまって新装なった校舎に於て、来年十月に90周年記念行事を計画している」と挨拶。今春着任した鍋岡利明校長から母校の近況についての報告があった。事務局からは会計決算報告があり、さらに来年の90周年事業の各期よりの寄附の現況報告と共に、今後一層の協力の要請があり祝宴に移った。

開宴は旧師の宮沢外与治氏が乾杯の音頭をとり、東京、大阪より参加した会員を混じえて賑かな同窓会風景がひろげられた。グループごとの歓談、応援歌の合唱、校歌と時の過ぎるのも忘れるかの賑かさ、最後に隅谷正峯氏の万才三唱でようやく散会した。

◇関東一泉同窓会総会が盛大に

関東一泉同窓会総会が今年も十月十七日九段会館で開催された。旧金沢一中、泉丘のOBら二百名が一堂に集り盛大に催された。

金沢の本部からは宮太郎会長、小川副会長、学校からは今春着任した鍋岡校長、田村教諭とが加わり、夫々挨拶に立った。宮会長からは「来年は全校舎の完成をまって母校創立90周年を記念した種々の行事を計画しているので絶大のご協力を」との言葉があり、鍋岡校長よりは学校の近況報告があった。

この度、永らく関東一泉会の会長をつとめられた鏑木政岐会長が辞任され、後任会長に浦茂会長を推せんされ満場の拍手で浦氏が会長に承認された。また新副会長に爪生復男氏が選ばれた。

浦会長から鏑木氏に長年の労をねぎらう謝辞があり、記念品を贈られた。

今年は女性会員の姿が多く見られ、司会の幸村鹿子さん、乾杯音頭に立った松田耀子さんと活躍が目立った。

祝宴は各卒業年次別にテーブルを囲み、和やかな歓談、舞台での校歌、応援歌、陰し芸と賑やかな同窓会風景が見られた。また代議士の坂本三十次氏も馳せ参じ、スピーチを行って旧交を温めた。宴は午後八時、来年の再会を期して散会した。

浦　茂新会長　（昭和二年卒、元防衛庁航空幕僚長、現在水産エンジニアリング代表取締役、東京石川県人会副会長）

◇一泉同窓会東海支部総会ひらく

例年九月に開催される名古屋地区在住会員の東海支部総会が今年も市内の弥生会館で九月二十一日開かれた。

湯谷外喜男会長以下二十余名の集い、金沢の本部より小川副会長が応援にかけつけた。同会は沖野永保事務局長のお世話にて湯谷会長と共に運営されており和やかな会である。広範囲に亘る地域の会員一二〇名余に対して常に連絡をとり消息を確め、交流につとめておられる。

また、来年計画されている母校90周年記念事業に際しても、その協力金としてこの程、金十万円を寄附として本部に贈られた。

一泉同窓会役員

一泉同窓会本部にては、この程、創立90周年を迎えるに当り記念事業として初代校長富田輝象先生胸像の復元、其の他の事業を計画している。この推進に役員を強化するため、九月に開いた理事会で副会長を六名に増やし、一中から竹田長松、小川忠男、川北篤の三氏、泉丘から三野裕、柴野常太郎、中谷道子の三氏を決め、今回の十月の総会でこれをはかり決定した。

◇市場一泉会だより

去る九月六日㈫、柿木畠「芝生」階上和室に於て、市場一泉会（会員二十七名）の総会が開かれ、出席者十四名にて大変盛大でした。

一中四十期から泉丘十六期まで前後三十年以上の年代の隔りを忘れて、校歌や応援歌を唱って、一様に母校に憶いを馳せ、今年90周年を迎える名門校の卒業生である事の誇りを語り合い、多忙な日常の市場人として頑張る事を誓って美酒を汲み交しました。

尚、今後二ヶ年間の執行部として、会長に平石英雄氏（一中四十一期）副会長に青梅浩治氏（一中四十六期）が全員一致で選出されました。

（係より）

◇富山支部総会開催

—上田コス先生を囲む会に併せて—

富山支部では、五十八年六月二十五日、昨年につづいて富山支部総会—上田コス先生を囲む会に併せて—を富山駅前ホテルよし原で開催した。上田コス先生は相変らずかくしゃくとして、富山県建設業協会副会長、砺波工業㈱取締役会長として第一線に御活躍中で、当時、数学の授業や生徒監や教頭として、きびしく指導を受けた生徒十九名が、上田コス先生を囲んで歓談した。尚、当日、富山地方鉄道㈱社長に就任された緒方裕氏（十七年卒）のお祝を兼ねた。

（幹事　稲松敏夫、西井義隆記）

片山（41年）　緒方（17年）
西井（17年）　樫見（17年）　柴田（12年）
高口（20年）　三崎（14年）　藤木（12年）
小川（17年）　谷（17年）　上田コス先生
新保（17年）　大垣（14年）　高瀬（14年）
寺（15年）　久保田（19年）　稲松（14年）
島村（14年）　将亦（14年）
（松木　17年）外に出席者

桜美会報告

斎藤弥吉（昭和十七年卒）

一泉同窓会先輩郷土史家、山森青硯先生語録によれば、会というものは、大体三年以内に消えてしまう。かるが故に三年続けば大したもの、十年続けば歴史に残る。それ故桜美会はその構成メンバーの経歴をまとめた名簿を作った方がよいと云われました。

その十周年は昨年終り、幸にも今第十一回桜美会美術展も終りましたので恒例の報告を致します。

須川温泉にて宮沢先生をかこんでの会食

一、桜美会秋季写生会

去る九月十日、小矢部市稲葉山牧場を中心に一泊写生会を催しました。小矢部市宮須の須川温泉に泊りました。参加者は宮沢先生他十一名、翌日は宮嶋峡および子撫川ダムを見学して金沢に帰着しました。

二、桜美会第十一回美術展

昨年盛大な十周年記念美術展を開催し三千五百名の方にみていただきましたが、本年は十月六日から十一日迄の六日間、金沢市片町大和デパート八階文化ホールに於て開催致しました。出品者七十余名、出品点数百余を数え、入場者も三千二百五十名に到りました。

これは会長宮沢外与治先生（八十三才）を中心に代表幹事石田直行氏他会員の努力及び同窓の方々の御後援の賜と深く感謝致しております。

尚主要出品者を紹介致しますと、特別会員大正十一年卒黒田桜の園氏のガラス絵陶三彩馬、名誉会員大正十五年卒井口政雄氏油絵琵琶湖風雲、特別会員美大名誉教授竹沢基氏洋画バラ、人間国宝隅谷正峯師（昭十三年）の刀子、二紀会委員堀義雄氏（昭十年）初代校長富田先生胸像写真、会友津田梅女史の水引細工等々数多くの力作が展示されました。

三、今後の行事予定

桜美会恒例年末クリスマスパーティは、十二月二十四日(土)午後六時より広坂一丁目芝生にて開催予定です。

新年総会は五十九年二月五日(日)午後五時より、清川町珀水ホテルにて開催します。

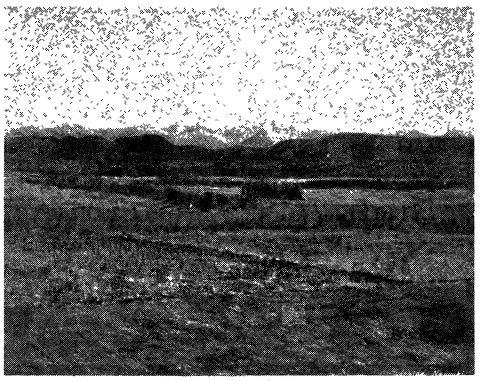
又新年初例会は一月十二日（第二木曜日）に、ホテル珀水にて午後七時より開催致しますので、作品持ちより御参集下さい。

人生は短かしされど美術は長し、といわれます。特に日本人は長寿となり、老後の問題のやかましい折に、美を追求する桜美会にどうぞ関心を持って下さい。入会金は不要、年会費五千円です。毎月一回の研究会は、かかさず清川町ホテル珀水に於て第一木曜夜七時より作品持ちよりずっと開催しております。長生きを願う人は絵筆を持って下さい。

事務局　金沢市南森本町ワ31―4

斎藤弥吉方

☎〇七六二―五八―一〇三三



第19回亜細亜現代美術展
ロッキー薄暮　努力賞　石田直行

◇同窓会本部へのご協力

同窓会本部への活動資金として左記の方々から夫々多額のご協力金をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

清水外明氏（一中五〇回）
中堂観恵氏（一中二一回）
辻　繁雄氏（一中二三回）
大門春樹氏（泉六回）
岩田繁雄氏（一中三一回）
関西八泉会（泉八回）
故矢田富雄氏（一中三五回）

創立九十周年記念として
一泉同窓会名簿発刊

この程創立90周年記念事業の一環として一泉同窓会の会員名簿が発刊されました。

明治二十七年の第一回の卒業生三名を始め物故会員を含めて約二万六千名を集録した五八五頁の大冊であり、目下これの頒布中で、ご希望の方は当事務局宛にお申し込み下さい。

価格は送料込みにて一部三千円、ご送金は郵便振替（金沢〇―四二五四番）をご利用下さい。

あとがき

編集子、大正二年生れ今春七十才を数え、いよいよ鬼籍の戸口に立った故か、初夏の頃から体調を崩し、遂に九月に入り生れて初めて病院に入院加療に至った。毎年春四月と秋の十月に会誌「一泉」を皆様にお届けしていたのがツイ不能になり申し訳ないことになりました。

十一月の退院でやっと開放、自由の身となりましたが、健康回復に時間がかかり、今日ようやく第八号が発刊出来ました。

内容その他不備の面が多々あり、お読みにくい点の多いことと思います。

今後も皆様のお力を借りて、充実した紙面として発行をつづけたいと存じます。

同窓、先輩の方々の絶大なるご協力をお願い申します。

（西多外喜次）